小堂見遺跡

－住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１４.３

茅野市教育委員会

序　文

八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰高原に抱かれた長野県南東部にある茅野市は、豊かな自然に育まれた、日本列島でも稀な縄文文化の華開いた地域です。市内には特別史跡尖石石器時代遺跡、史跡上之段石器時代遺跡・駒形遺跡や、棚畑遺跡出土の国宝土偶（縄文のビーナス）、中ッ原遺跡出土の重文土偶（仮面の女神）などの日本の縄文文化を代表する文化財が数多く残されており、「縄文の里」として全国にその名を知られています。一方、そうした「縄文」にかくれた感のある弥生時代以降の遺跡や遺物も、近年の市街地周辺における発掘調査で数を増し、その実態が明らかにされ始めています。

小堂見遺跡は八ヶ岳の西麓にある縄文時代と平安時代の遺跡です。これまでに８次の発掘調査等が行われ、縄文時代には集落と狩場、平安時代には集落に利用されたことが確認されました。

今回の調査は、400㎡に満たない小規模なものでしたが、縄文時代の土坑と平安時代の竪穴住居址が発見されました。特に八ヶ岳西麓で発見例の少ない11世紀後半とみられる竪穴住居址は、西麓に営まれた平安後期集落の実態や、中世に続く古村との関係を探る上で重要な資料となるものです。

こうした調査成果がまとめられた本報告書が、多くの方に利用され、地域文化向上の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施にあたりましては、事業者の田中昭十四様、田中康司様をはじめ、工事関係者の皆さまから遺跡の保護に対するご理解とご協力を賜り、円滑に作業を進めることができました。心からお礼申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆さまに感謝申し上げます。

平成26年３月

茅野市教育委員会
教育長　牛山　英彦

例　言

1 本書は平成25年度に実施した住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う長野県茅野市玉川神之原所在の小堂見遺跡発掘調査報告書である。
2 発掘調査は田中昭十四からの委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3 発掘調査は以下の期間に実施した。
　① 本調査　平成25年11月11日～14日
　② 整理作業および報告書作成　平成26年1年20日～3月10日
4 発掘調査における委託業務は以下の業者に委託した。
　基準点測量　株式会社両角測量
5 発掘調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管されている。
6 発掘調査は茅野市教育委員会事務局文化財課が実施した。組織は下記のとおりである。
　① 調査主体者　牛山英彦（教育長）
　② 事　務　局　小池沖磨（生涯学習部長）
　③ 文化財課　鵜飼幸雄（文化財課長兼尖石縄文考古館長）　中村浩明（考古館係長）
　　小林深志（文化財係長）　功刀司　山科哲　塩澤恭輔　守矢美空　小池岳史
　④ 調査担当　小池岳史（発掘調査・整理作業・報告書担当）塩澤恭輔
　⑤ 発掘調査・整理作業参加者
　　補助員　牛山矩子　酒井みさを　大勝弘子　武居八千代　立岩貴江子
　　作業員　宮坂功　柳沢省一

凡　例

1 本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。
2 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。
　①１号住居址→１住　②１号土坑→１土　など
3 本書における土層の色調は『標準土色帳』を参照した。

第１章　調査の経緯と経過

平成 25 年 11 月 8 日、小堂見（こどうみ）遺跡内に計画された住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う文化財保護法第 93 条第 1 項「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が生涯学習課に提出された。その際、同日から当該事業に着工したことが伝えられる。この連絡が文化財課文化財係に入り、直ちに現地を確認した。

事業地は小堂見遺跡の東側、神之原の東側集落と同区の共同墓地に挟まれた土地（旧地目：山林）で、東西に長い尾根状台地の頂部付近に位置する。工事の概要を施工業者から聞き取ったところ、建物の基礎工事に先立ち、事業地全体（695.92㎡）を南に接する市道の高さにあわせるため、地表から約 50㎝を掘削し、さらに建設範囲全体（373.68㎡）を 30㎝ほど掘削する計画が伝えられた。すでに事業地の南側と東側の境界付近が、明黄褐色土層（ローム層）まで掘削されており、東側境界付近に露出した断面で遺構確認が可能であった。そこで事業者の承諾を得て断面の精査を行い、平安時代の竪穴住居址（2 号住居址）と土坑（1 号土坑）を確認した。また、これから掘削が及ぶ箇所に遺構があるかを確認するため、事業者に調査の実施について協力を求めたところ、これが認められ、さらに表土除去に使用する重機（0.28㎥級）が提供された。文化財課職員立ち会いのもと、調査を進めた結果、新たに平安時代の竪穴住居址（1 号住居址）を確認した。事業地に接する市道の高さ、建物の構造ならびに重量との関係から、1 号住居址を保護しつつ工事を行うことは困難であった。再協議の結果、事業者の費用負担で、市教育委員会が本調査を行い記録保存することで合意した。これに基づき、11 月 11 日に発掘調査の委託契約を締結した。

本調査は 11 日に開始した。8 日の作業で調査区北側にロームマウンドと思しい箇所を確認したが、その範囲を特定できないでいた。そこで、その範囲を確認する作業から始めることにした。埋土は締りの弱い黒褐色土および暗褐色土で大量の明黄褐色土塊を含んでいる。ここから遺物はいっさい出土しなかった。ロームマウンドの可能性が高いとしたが、外側に向かうにつれて地山との区別が困難となり、結局、範囲は明らかにできなかった。なお、中央付近に焼土？を伴う硬化面、その周囲に炭化物の散布を認めたが、調査の対象とすべき時期の遺構といえる所見は得られなかった。遺構名と番号は付していないが、平面図を作成するとともに写真撮影を行い、同日の作業を終了した。

12 日は調査補助員と作業員を投入する。1 号住居址の遺構検出作業と、2 号住居址ならびに 1 号土坑の断面を精査し、その状態を写真撮影した。同日、測量業者が基準杭を設置した。作業時間の短縮、費用の削減を考えて、基準点は任意に打設し、これを世界測地系により座標化することにした。

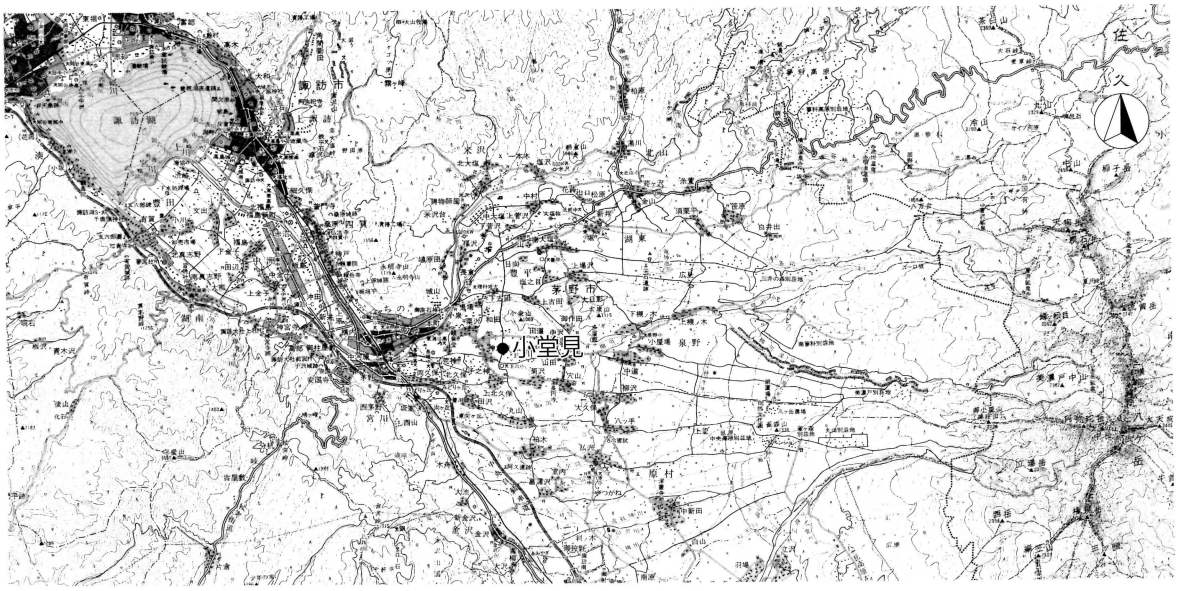
13 日は 1 号住居址の土層断面図を作成した後、床まで掘り下げ、完掘状態の平面図の作成と全体・細部の写真を撮影した。あわせて 2 号住居址と 1 号土坑の断面図を作成した。なお、事業者ならびに施工業者の配慮により、工事に伴う掘削を地表下 80㎝から 60㎝に変更する意向が示され、1 号住居址の床より下（掘方）が建物基礎の砕石下に保存されることになった。そのために本遺構の調査は床までに留めている。

調査最終日となる 14 日は、1･2 号住居址と 1 号土坑のレベル計測、1 号住居址カマドの解体作業を行った。

第２章 遺跡の位置と諸環境

小堂見遺跡（№ 160）は、茅野駅の東方約 3.5㎞、玉川地区神之原地籍（玉川 3251-4、3255-1）に所在する。八ヶ岳の西麓に発達した東西に長い台地上に立地し、広域農道（通称：ふるさとグリーンライン）が横断する台地幅 150 mほどの地点から、東西に約 300 mの広がりをもつ。遺跡の面積は約 28,000㎡、遺跡内の標高は 891 ～ 904 mを測る。

本遺跡では、平成 3 年の宅地造成工事に伴う発掘調査以降、平成 22 年まで 8 次の調査等によって、遺跡の西半に縄文時代中期初頭の集落、東半に平安時代（9 世紀代）の集落が確認された。また、縄文時代の落し穴も発見され、時期によっては狩場に利用されている。これらの遺構はいずれも、八ヶ岳の西麓において、通常、遺構検出の少ない北向きの斜面から発見された。その要因として、北側斜面が南側斜面よ



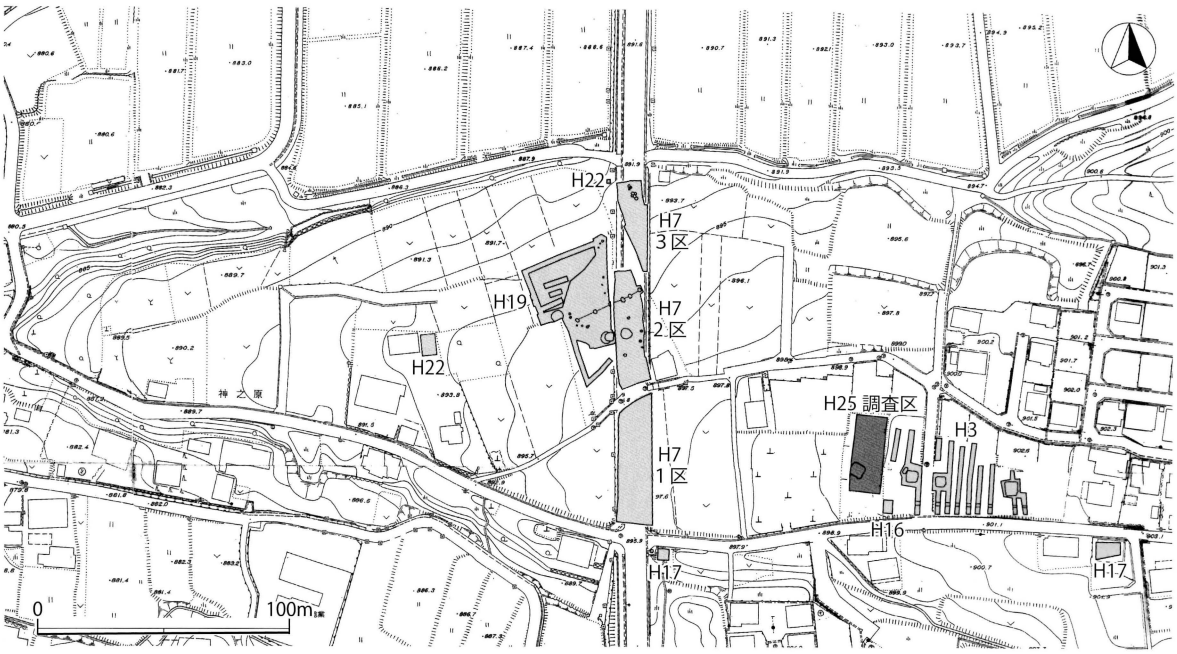
第１図　遺跡位置図（1/200,000）

り傾斜が緩やかであること、北側斜面の裾から水量豊富な清水が湧き出すことが指摘されている。

本遺跡とその周辺は、玉川地区の中でも多くの遺跡が残されており、特に縄文時代の遺跡は台地毎に立地するかの状態である。北側の台地には、前期末葉から中期初頭の住居址４軒、平安時代の住居址１軒、中世の地下式坑１基などが発見された上御前遺跡、南側の台地には、縄文時代中期の土器片と磨製石斧などが散布し、時期不明の土坑が発見された久保川遺跡がある。また、本遺跡の東方約 600 mの地続きの台地上に、ヒスイ製垂飾を伴う土坑などが発見された縄文時代中期の集落遺跡とみられる山田畑遺跡があり、その南側の台地に古くから知られた縄文時代中期の拠点的な集落遺跡である藤塚遺跡が立地する。

小堂見遺跡主要発掘調査等一覧

調査年	地点	調査原因	調査期間	調査面積	主な遺構	調査成果・所見
平成３年 （1991 年）	遺跡東側 台地平坦面	宅地造成	10 月下旬	250㎡	縄文時代 土坑（落し穴）1 平安時代 住居址３（9 世紀）	本遺跡における最初の発掘調査である。調査の結果、縄文時代は狩場、平安時代は集落に利用されたことが確認された。平安時代の竪穴住居址は、出土した土器からみて、すべて９世紀代と考えられる（未報告）。
平成７年 （1995 年）	遺跡中央 台地平坦面～ 北側斜面	県広域農道	5 月 15 日 ～ 8 月 4 日	1,420㎡	縄文時代 中期初頭住居址 1 土坑（貯蔵穴または墓坑、落し穴）17	縄文時代中期初頭の竪穴住居址と同時期とみられる土坑が発見され、新たに縄文時代の集落遺跡と確認された。これらの縄文時代の遺構は、通常、遺構が発見されることの少ない北側斜面から見つかっている。北側斜面の傾斜が南側斜面より緩やかなことに起因すると指摘される。
平成 16 年 （2004 年）	遺跡東側 台地平坦面	個人住宅 増築	10 月 5 日	8㎡		平成３年の宅地造成に伴う調査区の南西端に位置し、試掘トレンチからはずれた場所である。造成土の下に暗褐色土層～にぶい黄褐色土層が残り、その下の明黄褐色土層に掘削が及んだ。平面と断面を精査したが、遺構と遺物は確認されなかった。
平成17年 （2005年）	遺跡中央 台地平坦面	賃貸住宅	3 月 17 日	20㎡		現状は砕石敷きの土地であり、その造成時に明黄褐色土層まで削平されたようである。この面を精査したが、遺構は確認されなかった。
平成17年 （2005年）	遺跡東側 台地平坦面	個人住宅	12 月 21 日	57㎡		建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会った。遺構は確認されなかったが、黒褐色土層内から黒曜石２点が出土した。表土下の土層堆積状態から、台地に直交する浅い谷が南側から入ることを確認した。
平成19年 （2007年）	台地中央 北側斜面	店舗 医療施設	4 月 16 日 ～ 27 日	560㎡	縄文時代 中期初頭住居址３ 土坑 79（貯蔵穴または墓坑、落し穴、住居址の柱穴を含む）	平成７年調査区の西側隣接地が調査され、一帯に広がる中期初頭集落の一部が確認された。調査した北側斜面には、北から浅い谷が入り、「凹」状の微地形となるが、この谷の中に土坑が集中し、土坑を囲むように谷の縁辺部に竪穴住居址が分布する。この状態から、南北 70 m、東西 130 mほどの北に開口する馬蹄形の集落が推測された。
平成 22 年 （2010 年）	台地西側 平坦面	個人住宅 （蔵）	8 月 26 日	21㎡		建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、掘削が及んだ黄褐色土層～明黄褐色土層面を精査した。遺構と遺物は確認されなかった。
平成 22 年 （2010 年）	台地中央 北側斜面	移動通信 無線基地局	12 月 6 日	1㎡		1.5 m四方の一角を調査したが、遺構と遺物は確認されなかった。



第２図　発掘調査位置図（1/3,000）

第３章 発掘された遺構と遺物

発掘された遺構は、平安時代の竪穴住居址２軒と土坑１基である。遺物は、平安時代の土師器坏・皿・甕、須恵器坏、灰釉陶器碗、コモ編石、鉄製品？、黒曜石が出土した。

１号住居址　調査区の西側境界に遺構の一部がかかる上、東コーナー付近が工事で失われたが、南北 5.2 m、東西 5.1 mの方形プランと確認された。壁は高さが５～15㎝を測り、床からの立ち上がりは明瞭である。壁下に周溝は確認されなかったが、南壁下の床に置かれた大きな礫やＰ３を覆う厚い焼土との間に、周溝に代わる 15㎝ないし 20㎝ほどの空間がある。ここに壁の崩落を防ぐための土留め、あるいは「壁体」などの存在が推測される。これを補強するためのものなのか、南壁下の床に板状ないし柱状の大きな礫（安山岩）が壁に平行して置かれている。床は平らで、壁下を除き硬化する。その面は住居範囲のほぼ全体を掘り窪めた後、暗褐色土やにぶい黄褐色土を埋め戻してつくられる。本址の西半、西壁と北壁が交わるコーナー付近を中心に焼土が確認された。この焼土は壁側から住居内に向かって高さを減じるため、壁側がある程度埋まった後（第４図Ａ断面の第３層堆積後）に火を受け、形成されたものと考えられる。Ｐ３付近が最も厚く 10㎝に及ぶ。壁際から５箇所の穴が発見され、Ｐ４のみ貼床が確認された。Ｐ１～Ｐ３は直径 70 ～ 80㎝、深さ 37 ～ 51㎝を測る。深さが不揃いな上、埋土となる黒褐色土中に柱痕が認められなかったが、位置と断面形状から判断して柱穴と考えられる。Ｐ１では根固めに使われたとみられる礫が掘方に沿って多数出土した。直径 35㎝、深さ 28㎝を測るＰ５も柱穴で、ここから出土した板状礫もやはり根固めと思われる。貼床されたＰ４はＰ１～Ｐ３と位置・規模・形状が類似する。古い柱穴と考えることもできるが、埋土がローム塊を大量に含む黒褐褐色土で、一度に埋め戻されたような状態を示すため、貯蔵穴のような空間を必要とする穴の可能性がある。カマドはＰ１とＰ５に挟まれたコーナーにあり、礫（安山岩）と粘土でつくられる。軸方向はＳ－５°－Ｅを指す。両袖の芯材となる 10 点余りの板状礫以外は、原位置を留めていない。動かされた礫の多くは焚き口部から東側に散在するが、中には重ねられたように見えるものもある。炊き口部から燃焼部はもちろん、奥壁や両袖の礫の外側までしっかり焼けていて、その厚さは最大 8㎝を測る。埋土はレンズ状に堆積し、３層に分層された。第３層は土質ならびに含有物から、先に記したような壁の内側をめぐる構造物の崩落土と考えられる。一方、第２層および第１層は自然堆積層と思われる。

出土遺物には土師器坏・皿・甕、須恵器坏、灰釉陶器碗、コモ編石がある。その多くは、火を強く受けたＰ３・４とその周辺から出土した。土器類の中心は土師器坏・皿である。少なくみても７個体分が出土し、４個体を図示した。いずれもＰ３・４付近の第２層下位から焼土上にかけて出土した。図示した灰釉陶器碗はＰ４上の焼土に食い込み出土し、内外面に煤が付着する。コモ編石とみられる柱状・塊状の礫10点が、Ｐ４と壁に挟まれた僅かな空間から、床に密着して出土した。焼土に覆われるため、火を受ける前にまとめて置かれたものであろう。その５点に煤の付着が認められる。その他、黒曜石が８点出土した（原石・剥片・砕片・両極打撃痕のある石片、総重量31.7g）。

本住居址は住居の構造と出土した土師器坏・皿の形状からみて、11世紀後半の竪穴住居址と考えられる。

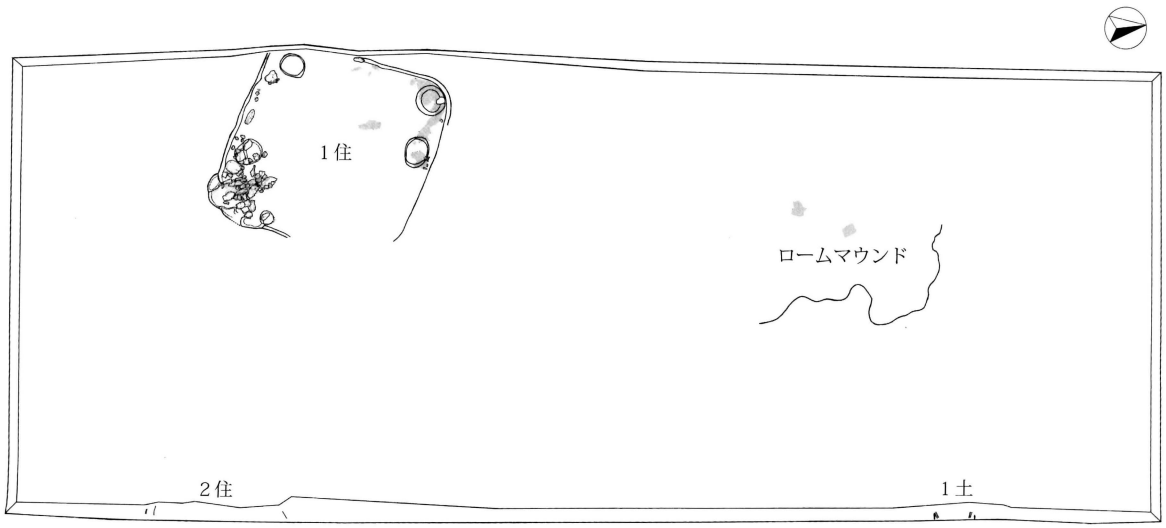
本遺跡が所在する八ヶ岳の西麓（茅野市域）では、これまでに多くの平安集落が調査され、その多くが11世紀前半までに消滅することが確認されている。『祝詞段』（1237）によると、本遺跡が所在する神之原は中世から続く古村で、古くは「原」と呼ばれていたようであるが、こうした中世から続く古村の成立時期や出現の背景を明らかにする上で、本住居址は重要な資料になるものと思われる。

２号住居址　調査区の東断面で存在が確認された上、耕作による撹乱が床付近まで及び、壁となる立ち上がりが失われていた。そのために平面規模ははっきりしないが、埋土の広がりから南北3.4 m以上の大きさであることがわかる。本住居址は明黄褐色土層を掘り込みつくられるが、断面によると、壁下を溝状に掘り窪め、中央付近に高く平らな面を作り出した後、その面にあわせて黒褐色土などを埋め戻してつくられている。こうしてつくられた床は、平らで非常に硬い。埋土は２層に分層された。第３層は１号住居址の壁際にみられた第３層と類似する。第２層は黒味の強い黒色土である。色調や粒子が均一であるため、自然堆積層と考えられる。

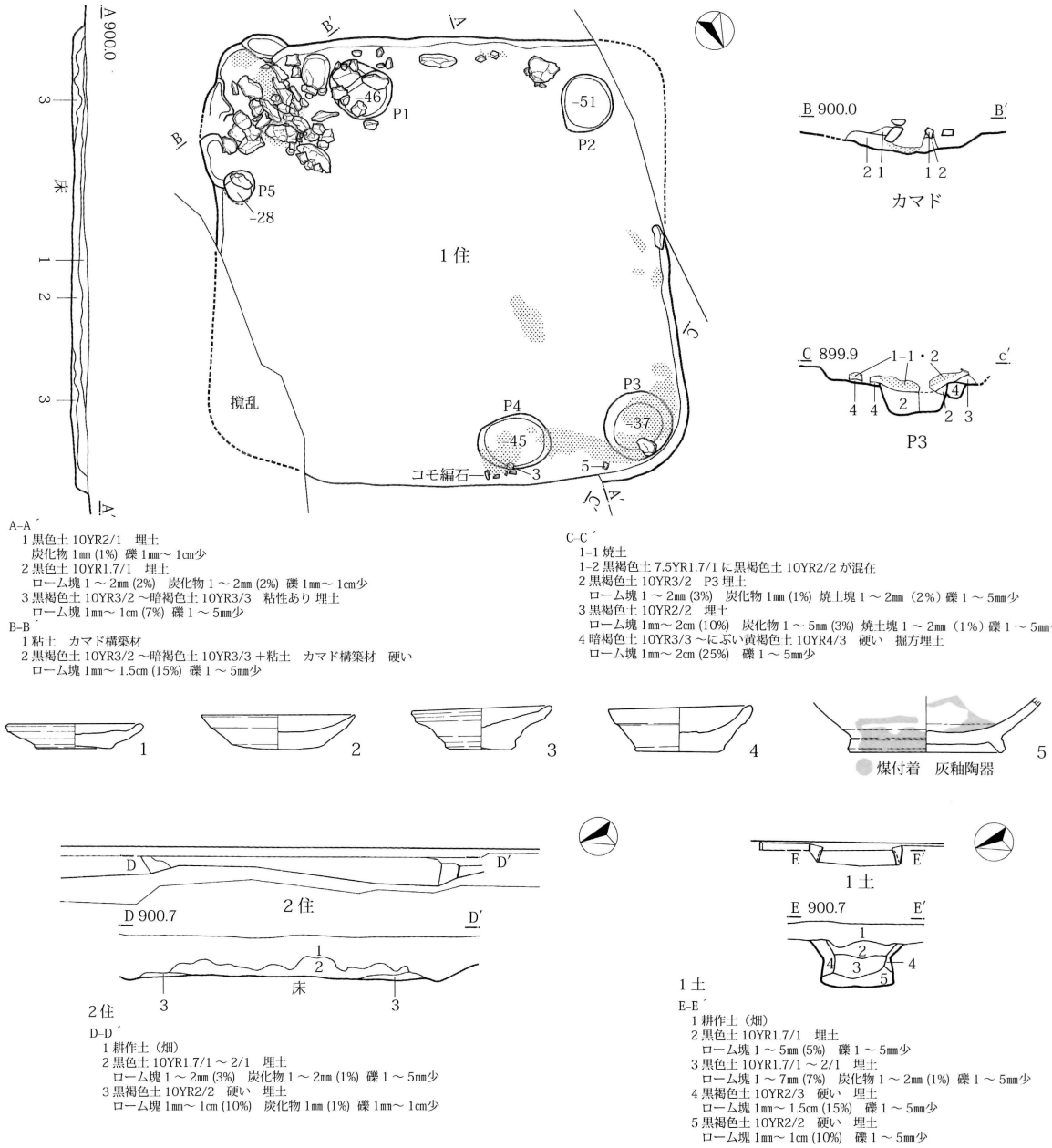
出土遺物は少なく、須恵器坏の小破片が３点出土しただけである。

須恵器坏の時期が９世紀後半と考えられるため、この時期に属する竪穴住居址の可能性がある。

１号土坑　調査区の東断面で存在が確認されたため、平面形は不明である。断面に土坑の中心がかかり、円形プランであるならば、上面径は110㎝、底面径は85㎝となる。現存する深さは53㎝を測る。断面形は「袋状」を呈し、中段を境に上位が大きく外反し、下位が袋状に抉れている。その形状から判断して、落とし穴または貯蔵穴と考えられるが、東に接する平成３年調査区から落し穴が発見されていることから、その可能性が高いように思われる。４層に分層された埋土は、堆積状態からみて、いずれも自然堆積と考えられる。埋土から黒曜石の砕片が１点（5.4g）出土した。



第３図　遺構全体図（1/400）



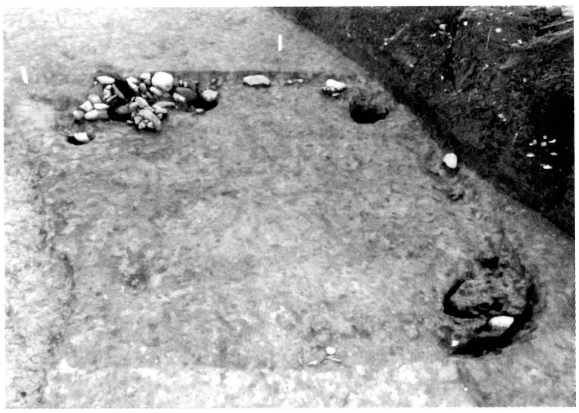
第４図　遺構平面図・土層断面図（1/80）、１号住居址出土土器（1/4）

報告書抄録

ふりがな	こどうみいせき
書名	小堂見遺跡
副書名	住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	小池岳史
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目６番１号　℡ 0266-72-2101
発行年月日	西暦 2014 年３月 28 日

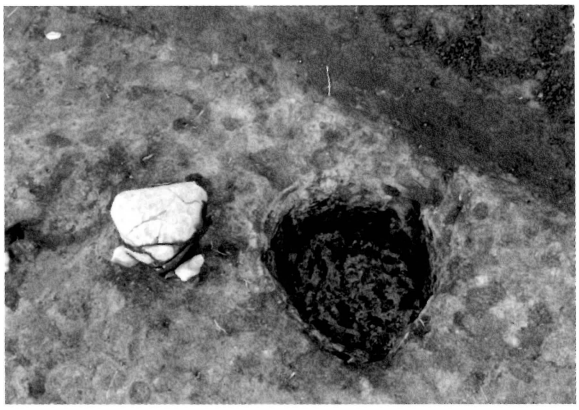
所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
小堂見（こどみ）	茅野市玉川神之原（ちのしたまがわかみのはら）	20214	160	36 度 59 分 30 秒	138 度 11 分 22 秒	20131111 ～ 20131114	374㎡	住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小堂見遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	土坑１ 竪穴住居址２	平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、コモ編石	八ヶ岳西麓で発見例の少ない 11 世紀後半の竪穴住居址が発見された。

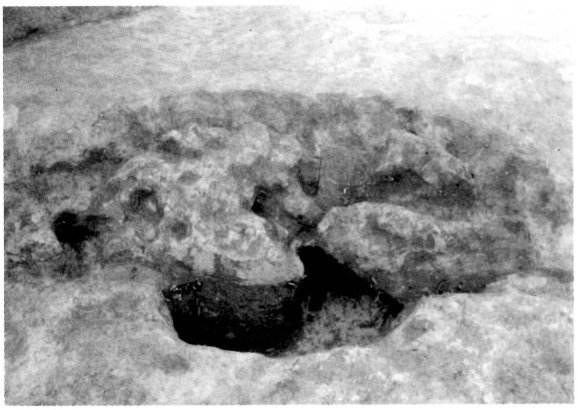


(1) 1 号住居址（北東から）

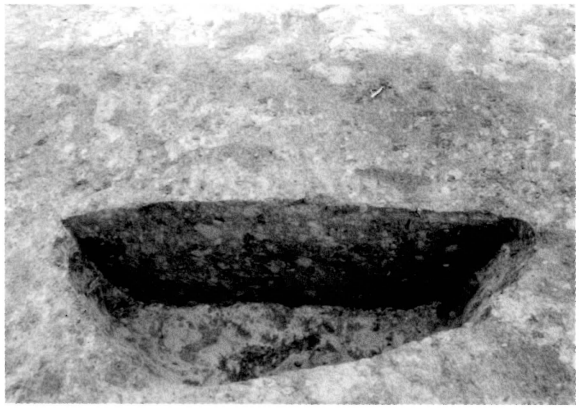
(2) 1 号住居址カマド（北西から）



(3) 1 号住居址Ｐ２と板状礫（北東から）

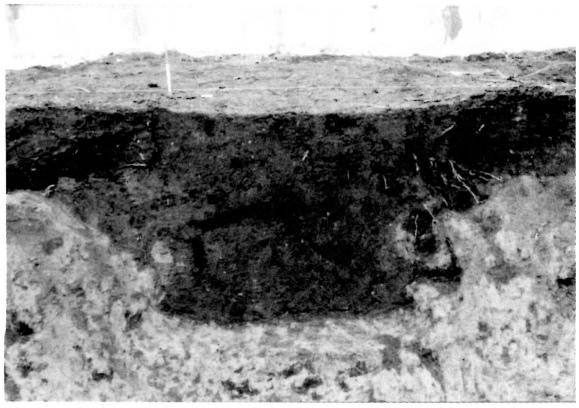


(4) 1 号住居址Ｐ３と焼土（南東から）



(5) 1 号住居址Ｐ４の土層断面（南から）

(6) 2 号住居址（西から）



(7) 1 号土坑（西から）

小堂見遺跡

―住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 26 年 3 月 25 日　印刷
平成 26 年 3 月 28 日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　長野県茅野市塚原二丁目 6 番 1 号（0266）72 － 2101(代)
印刷　有限会社 アドウェーブ
　　長野県茅野市塚原二丁目 5 番 51 号